

## アトモスフィア

## 研究教育体制

山村博平\*

生化学会にお世話になって40年になった。40年間で生化学会に何か貢献したかと聞かれると、いささか心もとない。少し貢献させていただいたとすれば、支部会をお世話したのと委員長を拝命した、2つの会、研究体制検討委員会と医科生化学教育協議会ぐらいである。思い出深いこの2つの会について振り返ってみたい。

研究体制検討委員会においては村松喬会長の指示、指導のもと雑誌生化学2003年に掲載されたように現状の研究体制に関する提言をまとめさせていただいた。まず大学院生の経済支援を取り上げた。わが国の将来をになう優秀な大学院生をいかに公平に援助していくかは大変難しい問題である。最近ティーチングアシスタントやリサーチアシスタントの数が増えたと聞くのは朗報である。ついでポストドク（ポストポストドク）問題を取り上げた。大学院生を増やすのは良いが、その後の受け皿（助手のポスト）が減少しているのでは何をしているのかわからない。やはり受け皿を増やす努力はこれからやるべき問題である。最近ある県で博士号取得者に対して小・中・高の教職の門戸を広げるというニュースを目にした。まさに私たちが望んでいることであり、他の都道府県も追従して行ってほしい。さらに科学研究費についても多くの要望をだした。年度を超えての使用については限定的に可能になったとはいえ、まだまだ不十分である。一般的に最も数の多い基盤研究B、Cの採用の増加についてもまったく不十分である。乏しい大学講座費では、大学院生の研究指導すらできない現状にこの基盤研究B、Cの果たす役割は非常に大きく、まさにわが国の研究の基盤を支えているといっても過言ではない。さらに増やしてほしい。この提言の結果、基盤研究における期間の長さや最終年度前の乗り換え申請など、かなり認めていただき、少しではあるが改善が見られたのであながち無駄ではなかったと思っている。

医科生化学教育協議会に関しては、長年香川靖雄先生のお話を聞くのを楽しみに毎年参加していたが、委員長に指名されたので、医学部医学科の生化学教育の現状をアンケート調査を通じて解析を行った。実に興味深い結果を得た。いくつかを紹介すると、まず40年前ほとんどの大学で採用されていた、「医化学、生化学」の名称は半数以上の大学で変更されていることがわかった。生化学の講義時間に関しては、講義科目が複雑化してきているので単純比較はむづかしいが、1コマ90分に換算して、70回以上（年間通じて週2コマ以上になる）の講義時間を担当している大学が10校あると同時に、30回未満の大学が3校あるなど、大学間の差が激しいことがわかった。学生実習の時間数にも同様の傾向が見られた。学生の講義への出席状況も80%を越す大学が大半であり、我々の学生時代に比して、学生が真面目になったようである。最近注目されているチュートリアル教育を生化学講義のなかで何らかの形で採用している大学が1/3を占めてきた。また以前ほとんどなかった基礎医学配属実習については、なんらかの形で8割の大学が実施しているようである。生化学会において研究発表が最重要であることは言うまでもないが、生化学を若い学生に興味を持たせ、知識として植え付けること、そして次代の研究者育成という観点からも、学部学生への教育問題はきわめて重要なテーマである。これからも学会としてこの方面にも継続して力を注いでいただきたい。

これらの提言にも関連したことだが、最近助手の名称が「助教」に変わったのはとてもよいことだと思っている。准教授を作ったのなら、いっそう「授」をつけて「助教授」にしてしまえばよかったのにと残念な気もする。40年を振り返って若い人の育成はやはり才能のある人を早く見極め、早い時期に助教（やはり助教授という名称が良い）にして独立させ、責任を持って研究させることに尽きると思う。文部科学省の科学研究費もそのような趣旨にそって出されているので、現場もそのような体制作りをせねばならない。

\*兵庫県立健康環境科学研究センター所長，神戸大学名誉教授